

幼小中一貫における国際交流学習の教材・単元開発 — 3 —

松尾 砂織 洲濱美由紀 岡 芳香 加藤 秀雄
杉川 千草 朝倉 匡夫 居川あゆ子 桑田 一也
深澤 清治 松浦 伸和

I はじめに

本研究は、幼小中一貫教育力を基盤とした国際交流学習のためのカリキュラム開発をめざす具体的な取り組みとして、教材・単元開発を目的とした研究の第3年次である。そして、この学習開発のために国際交流開発部会を設置し、次のような研究テーマのもとに研究開発を進めてきた。

研究テーマ

グローバル社会に生きる日本人としての基礎的な国際的コミュニケーション能力の育成を図る幼小中の発達段階に応じた学習の開発

ここでねらいとするのは、園児・児童・生徒を取り巻く社会のグローバル化が著しいこの21世紀において、世界の中の日本に生まれた私たちが幼小中段階でどのような国際的コミュニケーション能力を身につけるべきかを考えることである。

1年次(2003)の研究¹⁾においては、単元開発において最も大切なことはいかに幼小中の発達段階に適合した活動を作り、実施するかということであるという前提に立ち、幼小中の各レベルにおいての取り組みを考え、理論の構築と実践的な活動を行った。

2年次(2004)の研究²⁾は、初年度の研究で明らかになった2点を中心的な課題に据えて取り組んだ。1点目は、幼稚園、小学校、中学校に位置づけられた国際交流学習の定着である。そのためには、校種の枠を越えた単元構成と継続的かつ系統的な単元開発が必要となった。2点目は、子どもたちの実態を把握し、どのような力がついたか、どのような変容が見られたかを明らかにする評価方法の開発である。

3年次(2005)である本研究は、過去2年間取り組んできた国際交流学習³⁾のさらなる定着と、単元レベルで

の評価方法の設定、試行を課題として取り組んだ。今年度の国際交流学習は、幼稚園、小学校、中学校とも、広島大学の留学生を主とした直接的な体験活動を仕組むことで、コミュニケーションスキルの向上をねらいとした学習単元の開発を中心的な研究課題に据えた。2005年度の実態調査によると、外国の方と交流することに対しては、積極的な様子を見せる子どもがいる一方で、自分の思いを書いたり、話したりすることに苦手意識を持っていることが明らかになった。そこで、直接的な体験活動を仕組むことで、外国人との交流に必要な態度を身につけさせるとともに、体験の中で感じた思いや考えを表現しようとする意識を高めさせる活動を定期的に、かつ継続的に計画することができれば、コミュニケーションスキルを向上させることができるのではないかと考えた。そして、活動を仕組むにあたっては、国際交流学習の中でつけた4つの力の育成をはかる評価方法についても試行、実施することにした。

II 育成したい力とめざす子どもの姿

国際交流学習開発部会では、国際交流学習を通して育成したい力とめざす子どもの姿(子ども像)を次のように設定している。図-1にその概念図を示す。

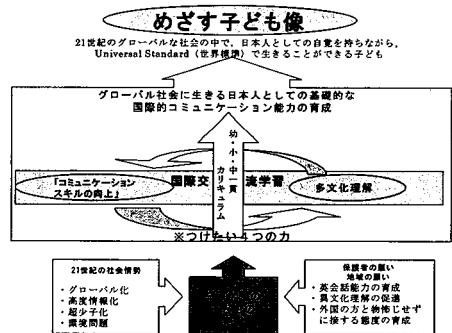


図-1 育成したい力とめざす子どもの姿

Saori Matsuo, Miyuki Suhama, Yoshika Oka, Hideo Kato, Chigusa Sugikawa, Masao Asakura, Ayuko Igawa, Kazuya Kuwata, Seiji Fukazawa, Nobukazu Matsuura: Developing materials and instructions for International Exchange Study from kindergarten through elementary and junior high school (3)

ここで挙げた「つけたい4つの力」とは次の内容をさす。

- ①多文化を受け入れ、理解し、それを尊重しようとする態度や能力【多文化理解】
- ②異なる文化や考え方を持った人たちとの共生を求める態度や能力【交流・共生】
- ③日本人という個人の立場で自己を理解し、自国での言葉で自己を表現する能力【自己表現力】
- ④国際社会で、相手の立場を尊重しながら自分の意見を明確に表現するための外国語を使ったコミュニケーション能力【コミュニケーション能力】

以下、留学生との直接的な体験活動を通して、つけたい4つの力の育成をはかった実践例を報告する。

Ⅲ-①中学校の実践事例の概要

本単元は交流学习の中に平和学習の要素を取り入れ、その両方を単元の目標として設定した。中学校3年生はこれまでも数々の交流学习を行ってきたが、卒業を控え、国際コミュニケーション学習の仕上げの単元としても位置づけている。

○ 単元名 「エスコートプロジェクト in Hiroshima」

○ 単元について

本単元「エスコートプロジェクト in Hiroshima」は、平和学習を軸とした留学生との交流の実践例である。生徒たちは、広島に関する平和学習を行い、それをもとに、『広島平和公園ガイドブック』を作った。次に実際に広島大学の留学生に、平和公園内の慰霊碑や原爆ドームなどを、英語で案内するガイド実習(11月2日)を行った。この日は2時間半という短い時間だったが、終始笑顔の絶えない、大変楽しい交流であった。

なお、学習のまとめとして、今回の経験を生かし、次の3年生に引き継ぐという視点から単元の学習内容の修正を行っている。

○ 単元の目標

・広島平和公園周辺の施設および慰霊碑を留学生にガイドすることで、戦争・平和について考え、積極的にかかわろうとする態度と、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。【自己表現力、交流・共生、コミュニケーション能力】

・平和を語る原点だといわれている被爆の事実を知り、戦争の人間破壊の恐ろしさを理解し、私たち自身、平和のために何をすべきなのかを考えさせる。【自己表現力】

【学習の実際】

学習の流れは次のようになる。

- ① なぜ学ぶのか・学習課題と目標の設定(1時間)
- ② 何を学ぶのか・学習の流れの確認と役割分担(1時間)
- ③ どう学ぶのか・調べ学習とガイドブック作り(4時間)
- ④ 平和公園ガイド実習・(1日)
- ⑤ どう学んだのか・単元の修正(1時間)

「なぜ学ぶのか」では、単元の概要と、目標を説明した後、課題1として、「ガイド実習で留学生さんに何を伝えたいのか」をクラス全体で考えた。なぜならば、今までの反省から、最初に生徒に学習の意義と価値を理解させておかないとその後の学習に興味がなかなか持てないという傾向があることがはっきりしてきたからである。生徒たちは、戦争、特に原爆についてまだまだ自分たちは知らないことが多いから、まずは、自分自身が戦争についてよく知り、平和への思いを伝えようと決定した。

伝えたいことが決まった後に、「何を学ぶのか」では、インターネット資料と、図書資料を用い、各自が平和に関する調べ学習を行った。同時に、英語教材『SADAKO』を読むことで、「原爆の子の像」にまつわるエピソードを学習するとともに、英語表現をガイドブック作りに役立てるようにした。

「どう学ぶのか」で、調べたことを元にガイドブック作りを行った。導入から、ガイドブック完成までの時間が6時間しかなくここまでの学習は大変忙しいものとなった。結局当初計画していたガイド練習は授業の中では時間を取ることが出来ず、秋休みの宿題になった。

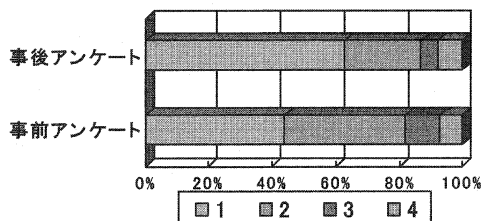


単元の実施に当たり、事前と事後に次のようなアンケートを行っている。

アンケート調査 1

Q 平和公園ガイド実習に意欲を持ってましたか？

- 1 大変持てた
- 2 まあまあ持てた
- 3 あまり持てない
- 4 まったく持てない (数字は%)



授業の中でこのグラフを生徒は次のように分析した。

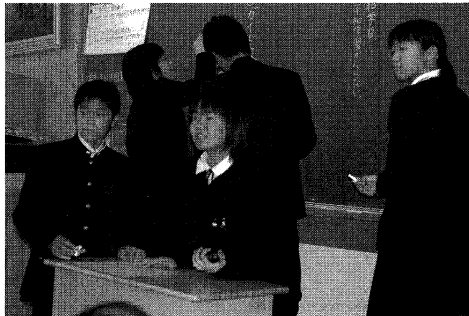
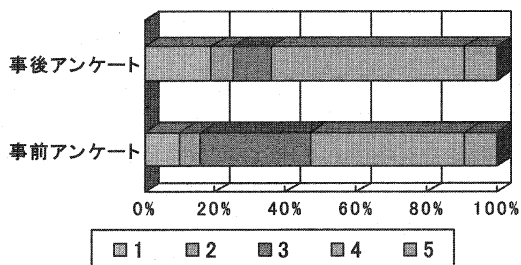
「2 まあまあ持てた」「3 あまり持てない」が減り、「1 大変持てた」が増えるのは、以下のよう理由である。

- 実習前は不安な気持ちもあったが、思ったより、楽しかった。成功感・達成感があった。
- 異文化に触れることが出来た。(イスラム教の礼拝)知識が増えた。
- 英語での会話が新鮮だった。何気ない会話が通じたことに喜びを感じた。

アンケート調査 2

Q ガイドをしたとき、実際に重要なことはどれでしたか？

- 1 英語が話せること
- 2 戦争についてよく知っていること
- 3 戦争について自分の意見を持っていること
- 4 交流しようという気持ちを持つこと
- 5 その他 (数字は%)



事前での調査の結果に比べ、事後では、「3 戦争について自分の意見を持っていること」が減り、「1 英語が話せること」「4 交流をしようという気持ちを持つこと」がさらに増えたことについて生徒は次のように分析している。

- 交流をしようという気持ちを持つこと」と考える人は、もともと多かったが、実際に体験してみても、意欲の大切さを実感した。
- 関わりを持とうという気持ちの人が増えた。話すときも聞くときもこの気持ちが大切と感じた。
- 英語力の必要性(自分の意見を持っていても、伝える手段がない。)ことを実感した。
- 相手とよりよく交流したいという気持ちから、1が増えた。

「どう学んだのか」では、以上のアンケートの結果等をもとに課題について以下の修正案を考えた。

《平和学習について》

→1・2年生のうち一度平和公園に学習に来ておく。

(資料館・慰霊碑めぐり・被爆体験講話)

《ガイド実習について》

→少人数でガイド。

→ガイドの準備の時間をもう少し増やす。

(文章作り。話し方・対応の仕方。練習時間など)

→なるべく簡単な表現でガイドできるようにする。



【成果と課題】

学習を進めて行くにあたっては、目的(目標)・内容・評価を明確にすることが必要で、これらが不明瞭であると、生徒は学習に対する意欲が低下する。また、学習を効果的に進めるためには、課題設定から、情報収集、情報再構成、再発信までの学習の道筋を身に付け、

主体的・創造的に学習する力の育成、即ち、「学び方を学ぶ単元」を効果的に配列することも必要となってくる。これらがよりよく循環することで、生徒たちの学びもより向上することが期待される。表-1は、単元の評価基準表を示している。

表-1 単元の評価基準表

評価規準	平和公園のガイドプランを作成することを通して、戦争・平和について考え、積極的にかかわろうとする態度と、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度をもっている。		
評価基準	A	B	C
【自己表現力】 【交流・共生】 【コミュニケーション能力】	・ガイドプラン作成に積極的に参加するとともに、ガイド実習で、留学生と積極的にコミュニケーションを図ることができた。	・ガイドプラン作成に積極的に参加するとともに、ガイド実習で、留学生と積極的にコミュニケーションを図ろうとした。	・ガイドプラン作成に参加する。ガイド実習で、留学生とコミュニケーションをとろうとする意欲が乏しい。

Ⅲ-②小学校の実践事例の概要

4年生の年度当初の調査によると、子どもたちは、「外国のことをいろいろ知りたい」「外国の人とお話したい」など国際交流学习に大変意欲的であるが、「自分の考えを話したり書いたりする」「外国の人に手紙を送る」など自分の思いを表現することについては消極的な傾向が見られた。そこで、本年度は、外国の方と直接ふれあう体験など、子どもたちが楽しみながら、自然な状況の中で自分の思いを積極的に表現することができるようにしていきたいと考えた。また、多文化理解の学習として積み上げていくために、年間を通して7名の留学生に来ていただくようにした。

【単元について】

- 学年：広島大学附属三原小学校4年生 37名
- 単元名：「留学生さんとなかよくなるう」
- 実施期間：平成17年7月～平成18年2月

本単元は、留学生との交流を通して、いろいろな国の文化に関心を持ち、それらの国々に対する理解を深めたり受け入れたりしようとする気持ちを持たせる学習である。子どもたちは、これまでに年に1回程度外国の方の学校訪問を受けてきているが、その機会を国際交流学习の中にきちんと位置づけることができていなかった。そこで、本年度は、年間を通して同じメンバーの留学生と交流し、子どもたちに多文化理解やコミュニケーション能力を育てていこうと考えている。留学生との交流という外国の方と直接ふれ合う体験によって、子どもたちが楽しみながら学習に意欲的に取り組むことを期待している。

○ 子どもの実態

子どもたちは、学級集団の中で、自分の思いを素直に表現でき、英語を用いる活動にも積極的に取り組もうとする意欲を持っている。7月と9月に行った留学生との交流を「楽しかった」と答えた子どもは、37名中35名で、その理由として「いろいろな国のことを教えてもらった」「楽しく遊べた」などをあげている(平成17年9月2日調べ)。一方で、「あまり楽しくなかった」と答えた2名の子どもは「言葉があまり通じない」「うまく遊べなかった」などをあげていた。

○ 学習にあたって

留学生との出会いが楽しいものになるように、子どもたちの思いを生かした交流会が子どもたちの力で運営できるようにする。留学生には、民族衣装など出身国の文化をあらわすものを持ってきていただくようにあらかじめお願いし、母国の文化を紹介していただくとともに、ゲームなどで直接ふれあう活動を通して、子どもたちの異文化に対する抵抗感をなくすようにする。留学生の国の文化について調べる学習の一環として、異文化を直接体験する学習を位置づける。また、国語科の「くらしを見つめて」の単元と関連させることによって、目的意識を持った国際交流学习をさせ、多文化理解を深めさせていきたい。留学生にも子どもたちの学習意図を把握してもらえるように、事前の打ち合わせや連絡を密にとり、年間を通じて学習を積み上げていくことができるようにする。

○ 単元の目標

・留学生の国の文化や自分の国の文化との違いを調べることを通して、それぞれの文化を大切にしようとする気持ちを持つことができるようにする。【多文化理

解, 交流・共生]

・進んで交流の準備をしたり, 自分たちの調べたことを相手にしっかりと伝えたりすることができるようにする。【自己表現力】

・留学生とのかかわりを通して, お互いの身近な生活について交流し, それらの国や人々と主体的にコミュニケーションすることができるようにする。【コミュニケーション能力】

○ 学習計画

第1次 留学生さんとなかよくなるよう (3時間)

第2次 留学生さんの国の文化について調べてまとめよう (5時間)

第3次 調べたことを発表しよう (2時間)

【授業の実際】

<第1次>

「留学生の自己紹介を聞いたり一緒にゲームをしたりすることを通して, いろいろな国の文化に興味を持ったり積極的にコミュニケーションをとったりする」ことをめあてとして, 留学生との交流学習を行い, 留学生の母国語で, 挨拶や自己紹介をしていただいた。



また, 民族衣装や民族舞踊を見せていただいたり, 母国の文化について紹介していただいたりした。そして, 子どもたちといっしょに行ったゲームの中で, それぞれの国のジャンケンを教えていただくなど, 楽しいひとときを過ごすことができた。

留学生との交流学習を終えて, 子どもたちは, 様々な感想を述べていた。

・一番印象に残ったのは, ドミニクさんのパイナップルの皮でできた服とキリスト教のペンダントです。なぜかというキリスト教のとっても大事なお守りだからです。

・インドネシアから来られたアルマンさんは, 特別な帽子と特別な服を見せてくださいました。なぜかぶるのかな, 何で学校の先生だけかぶるのかなと, どんどんハテナがわいてきます。

・留学生さんに「そうです」とか「ありがとう」とか

言ってもらえたとき, 心が温かくなりました。日本語がしゃべれない留学生さんが一生懸命日本語をしゃべろうと努力されていたからです。

<第2次>

留学生の国の文化について, 調べてまとめる学習に取り組み, 11月には, 留学生にも参加していただいた。子どもたちは, 自分の調べたいことに合わせて, それぞれの留学生のそばに集まり, 留学生と直接ふれあう中で, たくさんのことを学ぶことができた。また, 留学生の英語混じりの日本語にも, 一生懸命に耳を傾け, 何度も問い返ししながら, コミュニケーションをとろうとしている姿が見られた。



授業後のふり返りで, 子どもたちは次のようなことを述べていた。

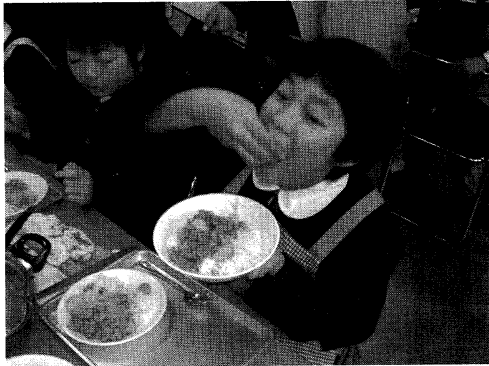
・日本の箸は木でできているけど, 中国の箸は少し平べったかったし, 金属でできていたから重かったです。

・ニノさんは, パソコンを見せながら, タイのことを教えてくれました。質問をすると, 知りたかったことも分かったし, 知らなかったことまでどんどん教えてくれてよく分かりました。

・今日再び交流したんだけど, 自分なりに一生懸命質問もしたし, 一人ひとりが笑顔で会話している様子が目に焼きついています。本やインターネットだけでは知れない世界をたくさん味わいました。ありがとうございました。

12月には, 「留学生といっしょに作ったバングラデシュカレーを, 手で食べたり箸で食べたりする活動を通して, いろいろな食文化の違いを体験し, それぞれの文化を大切にしようとする気持ちを持つ」ことをめあてとして, 留学生の国の食文化を直接体験する活動を行った。子どもたちは, 国語で「手で食べる, はしで食べる」(森枝卓士 学校図書四下) という説明文を読み, 国による食文化の違いについて学んでいる。そこで, バングラデシュから来られた留学生にカレーの作り方を教えてもらっていっしょに作り, インディカ米と日本米のカレーライスをいろいろな方法で食べて

みる活動を行った。



子どもたちの授業後の感想は、次の通りである。

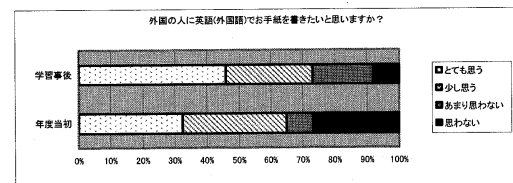
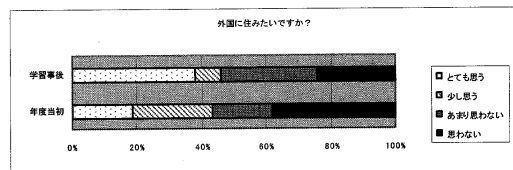
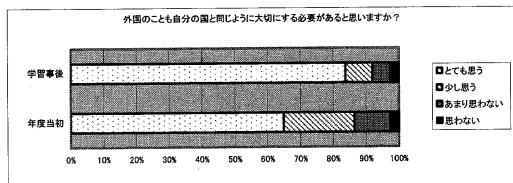
- ・インディカ米は箸で食べようとしてもつるつるするから、手がスプーンの役目をしているんだなあと思いました。
- ・箸やスプーンでは普通に食べているけど、手は感触があって、食べごたえがありました。
- ・その国それぞれの食べ方があるんだなあと思いました。その国の文化を大切にしたいです。

<第3次>

2月に留学生を招いて、調べ学習の発表会を開く予定である。

【成果と課題】

12月に行った年度当初と同じ質問項目での調査によると、「外国のことも自分の国と同じように大切にすることがあると思いますか」「外国に住みたいですか」「外国の人に英語（外国語）でお手紙を書きたいと思いませんか」の3項目については、「とても思う」という回答



が大きく増えた。留学生との交流や異文化理解の学習を通して、外国の人をより身近に感じることができた成果が伺える。

その他の項目については、あまり大きな変化は見られなかった。今後も、留学生や他国の子どもたちとの交流システムを整備し、子どもたちが直接多文化にふれることのできる機会を継続して保障していきたい。

Ⅲ-③幼稚園の実践事例の概要

幼小中を通してのめざす子ども像として、「21世紀のグローバルな社会の中で、日本人としての自覚を持ちながら、Universal Standard（世界標準）で生きることができる子ども」としている。その土台として、幼児期にはいろいろな人や文化に出会い、いろいろな人に親しんだりふれあったりすることを楽しめる力を育むことをめざしている。

幼稚園では、「絵本・音楽」「日本古来の文化と四季に親しめる行事」「外国の人々」「異年齢の友達・高齢者」の四つの活動の視点から国際交流学習のカリキュラムの編成を考える。幼児期には特に身近な人や、文化にふれるという日常の保育全体が、国際的コミュニケーション能力をはぐくむ土台づくりとなっているととらえている。

ここでは4つの活動の視点のうち「外国の人々」との交流を焦点化し、取り組みを紹介する。(表-2参照)概要を以下にまとめる。

表-2 留学生交流年間計画

月	内容	人数	国
5月	ヨモギ摘み 外国のビッグブックの読み聞かせ	BCUの学生	アメリカ
7月	七夕祭り(星の話を聞こう)	5人程度	いろいろな国
7月	お泊り会(年長)	5人程度	いろいろな国
9月	一緒に遊ぼう	5人程度	いろいろな国
10月	お月見コンサート	5人程度	いろいろな国
11月	一緒に遊ぼう	5人程度	いろいろな国
12月	クリスマス会	5人程度	いろいろな国
1月	正月遊び	5人程度	いろいろな国

3歳児は、園生活の中で保育者を心のよりどころとしながら信頼関係を作り、自分の居場所を見つけ、生活リズムに慣れ、安定感を得て少しずついろいろな人とのかかわりを広げると考える。

そのことを踏まえ、まず、保育者自身が留学生と楽しく話をしたり遊んだりし、自然に留学生に親しめる雰囲気をつくり、その雰囲気に子どもたちがふれるこ

とで、子どもたちが安心感を持って留学生にかかわることができるのではないかと考える。こうした幼児期の体験が基礎となり、小学校・中学校でのコミュニケーション能力へとつながっていくのではないかと考える。

また、保育にあたり、実態や時期に応じて、無理のない形で留学生と一緒に遊び、留学生から簡単な手遊びを教わる場など様々な交流の場を取り入れ、平素より親しんでいる活動を通して、いろいろな人と出会い、親しみをもつきっかけになるように配慮した。

1回の交流における留学生の参加人数は3～5人である。交流の活動の流れは次の通りである。(表-3)

表-3 留学生交流の一日の流れ(例:7月七夕祭り)

時間	内容	留学生の方の動き	場所
9:00	好きな遊びをする。	・いろいろなクラスの子どもたちと自由に遊ぶ。	園庭 保育室等
	夜空や星の話を聞いたり、シャープペンを食べたりする。 外国の絵本の読み聞かせ	・シャープペンを子どもたちと一緒に食べる。 ・留学生の方の自己紹介 ・外国の絵本の読み聞かせをする ・簡単な外国の歌・手遊びがあれば子どもたちに教える。	保育室
10:30	七夕祭りに参加する ・七夕の由来の話を聞く ・お母さんコーラスを聴く ・「七夕」を歌う ・留学生の話を聞く ・先生の出し物を見る	・子どもたちと一緒に七夕祭りに参加する。 ・外国の夜空や星など、七夕にちなんだ話があればする	遊戯室
11:30	お弁当を食べる 好きな遊びをする 片付ける	・保育室で一緒にお弁当を食べる。	保育室
13:00	留学生とお別れする	・自然な形でお別れする	

【実施期間】

平成17年5月～平成18年1月(7回)

【ねらい】

いろいろな国の人と一緒に遊ぶことを通してふれあいを楽しむ。

【実践例-3歳児】

5月25日(水)

〈イーストキャロライナ州立大学(ECU)の学生による外国のビッグブックの読み聞かせ〉

エピソード1

優しい笑顔と優しい声で子どもたちに語りかける学生。その雰囲気になんか安心し、身を乗り出して嬉しそうにニコニコと絵本を見る子どもたち。



読み聞かせの間、子どもたちは絵本にじっと見入っていた。終わって、「もう一回読んで～」とリクエストする子どもたちもいた。

考察

言葉は分からないはずなのに、何が子どもたちをひ

きつけるのか。英語だから話の意味が分からないのではなく、絵や学生が話す優しい声のひびきなどの雰囲気心地よかったと考えられる。言葉が通じないということより、見たい聞きたい、楽しそう、何かな?といった感覚で多文化にふれているように感じた。

10月6日(木)

〈一緒に遊ぼう〉素朴な疑問をもつ子どもたち エピソード2

ナイジェリアの留学生との保育室での一場面。肌の色の違いに気づいて、素朴な疑問をもち、自分の肌を見たりたり留学生の大きな手のひらをさわったりたいたりしてふれあっている姿が見られた。



- A男「なんで黒なん?」
- B男「ぼく茶色」
- C男「なかなかそんな色ない」
- D女「ボビーさん黒いんよ」

考察

自分と他者の違いに気づいたり、いろいろな人との出会いを楽しむことができたようになってきていると考える。

10月6日(木)

〈一緒に遊ぼう〉心の扉の開き方に個人差がある エピソード3

友だちが時間の経過とともに留学生に抱っこをしてもらってどんぐりをとったりしながら少しずつ留学生さんに慣れていく中、E女は保育者の服をずっとつかんでいる姿があった。いつもとは違う人(留学生)がいることに少々不安だったのだろう。

10月20日(木)

〈一緒に遊ぼう〉 エピソード4

みんなで留学生に母国の鬼ごっこを教わって遊ぶ時、E女は「帰りたい・・・」と言い、遊びが始まるととうとう泣き出してしまった。



11月17日(木)

〈一緒に遊ぼう〉焼き芋 エピソード5

E女は、この日も朝から半泣きだった。保育者がしばらく抱いていた。そのうちに「あぶくたった」が始

まった。すると、自ら手を出して留学生と手をつなぐ姿が見られた。また、弁当の時には、留学生の横に座り、留学生の弁当の漬物までもらって食べるという姿も見られた。

考察

E女は、当初は留学生に抵抗感を感じていたが、時間の経過とともにその人柄に安心し、留学生を抵抗なく身近に感じ、まさにいろいろな人との出会いを楽しむことができるようになってきている姿だととらえた。

子どもたちが時間の経過とともに留学生の人柄に子どもたちは安心してかかわっていけるような保育者のかかわりが大切だと考えている。

12月4日(日)

<一緒に遊んで嬉しいね>楽器遊びを通して

エピソード6

朝から帰るまでの一日を留学生と一緒に過ごした。留学生の母国の音楽を紹介してもらい、ボンゴやコンガ、マラカスなどの楽器に触ったり踊ったりして楽しいひと時を過ごした。留学生と顔を見合わせながら楽器をたたいたり、一緒に手をつないで踊ったりするなど、それぞれに楽しむ姿が見られた。

また、帰りの支度ができると、子どもたちは、留学生の大きな膝の中にすっぽりと入って座る姿が見られた。

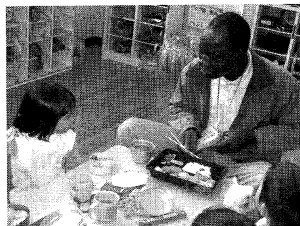
考察

言葉だけではないスキンシップや身体全体で表現したりするなど、子どもたちの表現は様々で、その場の雰囲気を心地よく楽しんでいるようだった。

自然な生活の中で留学生を身近に感じたり親しみを持ったりしてほしいと願い一緒に過ごしたが、留学生を身近に感じるようになってきているように思った。

【成果と課題】

3歳児は、外国の言葉が話せないとかかわることができないといった抵抗感もなく、物を介し遊びを通して安心してふれ合う姿がよく見られた。取り組み始めたころは、保育者を心のよりどころとする3歳児にとって、外国の人々との交流の場を設けることは時期が早いのではないかと感じたが、継続した取り組みの中で見えてきたことは、年齢が低ければ低いほど、言葉や肌の色の違いに対する抵抗感も小さく、誰に対



しても親しんだりふれ合ったりすることが無理なく自然にかかわることができるということがわかった。3歳児の時期だからいろいろな人や文化に出会うことは、意味のあることだと感じた。

また、子どもたちが無理なく自然な形で留学生にかかわることができるために、自由に遊ぶ時間やまとまった活動の時間など、子どもの姿や時期や交流の形を考慮した。子どもたちが留学生を身近に感じられる気持ちを育むために、保育者が留学生に親しみの気持ちをもってかかわったり一緒に遊んだりしたことも大切なことだろう。

今の家庭では英語塾に通う子どもが増えている。本学園の留学生交流は、決して、早期教育を促すための取り組みではない。小さいうちから英語が話せるようになることが大事なのではなく、誰にでも親しみの気持ちをもってかかわる心を育むことが大事なことである。幼稚園における留学生との交流の中で育まれた外国の人々を身近に感じる気持ちが、連続性として小学校・中学校の国際交流学習へとつながるのではないかと考える。そのためには、留学生交流は特別な行事ではなく、自然な形で子どもたちの日常生活の中に位置づけられることが理想であると考えます。

いろいろな人に出会い、いろいろな話を聞くことや一緒に遊ぶこと、一緒に過ごすこと、いろいろな人にふれあうことで、「そういう人もいるんだ」「そういう考えの人もいるんだ」ということに気づき、みんなを認めて受け入れる気持ちが育まれ、その土台を幼児期には大切にすべきだと考えている。このことは、幼児教育の不易の部分であり、また、幼児教育の不易の部分を大切に与えることが国際交流の基本であると考えます。

3歳児の子どもにとって、広く与えられるならば、身近な友だちの存在がすでに多文化であり、身近な友だちとかかわりの中で、友だちの良さを認めたり思いやりの気持ちをもったりなど、友だちと多様な経験を積み重ねている。自分をとりまく身近な同年齢の友だち、異年齢の友だち、高齢者、外国の人々など、いろいろな人がいる。そのいろいろな人を身近に感じ、親しみの気持ちをもってかかわることのできる力が、21世紀を生きていく子どもたちに育みたい力なのである。

IV 研究の結果と展望

国際交流学習の教材・単元開発を目標として、今回でプロジェクト3年目を終えた。発達段階に応じた活動を作成するにあたっての理論構築に始まり、具体的な単元開発を通して、さらに評価方法までを視野に入れ



た研究を行ってきた。3年目を終えて、今回の目標であった国際交流学習の具体的な取り組みの定着、そしてより具体的な評価の視点・方法についてまとめてみたい。

第1に、国際交流学習のプログラム化がある程度、確立されたと言えるであろう。

1) 留学生との交流：広島大学の留学生の参加によって、遊びや説明などを通して交流を図るというパターンは定着してきた。また、どの学年の児童・生徒も人種、言葉、肌の色に当初は戸惑い、時にはおびえていた子どもたちも、次第に心の垣根が取れていくのを実感することができた。

2) バイ・カルチュラルからマルチ・カルチャルへ：外国語の中で明らかに主要な言語である英語を母語とする人々との交流が中心になることが多いが、本プロジェクトで国際交流学習に参加したのは英語圏以外の留学生がほとんどであり、英米一辺倒から多国籍文化への耐性が育成されている。

3) 学年別活動形態：次のような学年別活動形態が確立された。

幼稚園：活動のお膳立ては教師主導であることが多いが、遊びを通して、あるいは英語を通して笑顔で一緒に活動することにより、しかも日常的な活動により外国の人々を身近に感じる気持ちを育む活動が中心となる。その際、保育者の態度によって決まる部分も多い。

小学校：「外国のことをいろいろと知りたい」など理解を中心とする活動から、外国の人々と直接ふれあう体験などを通して自然な状況の中で自分の気持ちを積極的に表現することをめざした活動へと移行する。

中学校：エスコート学習、ガイド練習をしながら、相手のことを積極的に理解すること、さらにそれにとど

まらず、自らの学校や文化について積極的に伝えていくとする活動へと発展する。

第2に、評価については単元レベルでその緒についたばかりである。今回はたとえば中学校では平和学習と連動させたため、「戦争・平和について考える」など単元固有の評価観点および基準の設定に終わった。しかしながら、これは重要な一歩であると考えている。めざす子ども像に望まれる4つの力、すなわち多文化理解、共生・交流、自己表現力、コミュニケーション能力の4つについてそれぞれ必要最低限、他律的、自律的・積極的の少なくとも3段階において、それぞれの単元学習においてつけたい力の到達レベルを設定していくことで、今後、考案されるさまざまな活動を集積して、国際交流学習のための活動バンクづくりを図っていきたいと考える。

参考文献

- 1) 深澤清治，松尾砂織，岡野佳子，松島英恵，江本繁子，岡芳香，奥井京子，中山貴司，林原慎，居川あゆ子，桑田一也(2003)「幼小中一貫における国際交流学習の教材・単元開発(Ⅰ)」、『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』，第32号，pp. 23-31.
- 2) 深澤清治，松浦伸和，松尾砂織，洲濱美由紀，岡芳香，加藤秀雄，杉川千草，朝倉匡夫，居川あゆ子，桑田一也(2004)「幼小中一貫における国際交流学習の教材・単元開発(Ⅱ)」、『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』，第33号，pp. 139-147.
- 3) 広島大学附属三原学園編著(2005)「21世紀型“読み・書き・算”カリキュラムの開発」，pp. 26-69.